

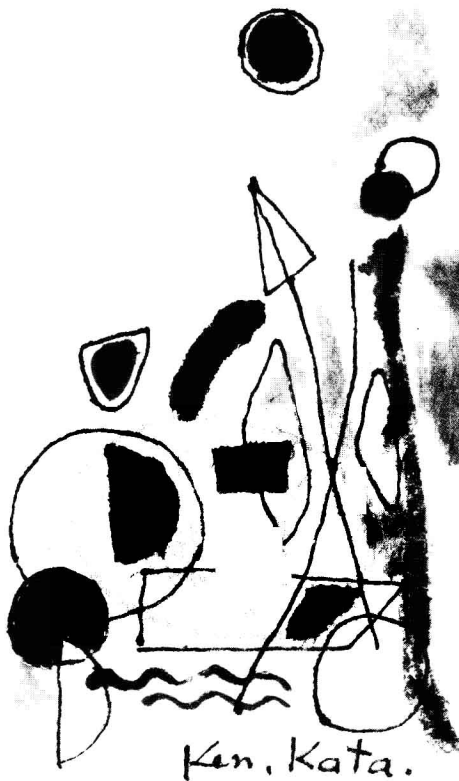
秋田佐知子

虹を織る
上



灯を織る上

秋田佐知子



検印廃止

虹を織る・上 定価八五〇円

昭和五十五年十月十日 第一刷発行

著者 秋田 佐知子

発行者 藤根 井和夫

印刷 綑 亨 有 堂

製本 綑 明 泉 堂

発行所 日本放送出版協会

郵便番号 一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

©1980 Sachiko Akita

虹を織る
上
・目次

第一章	佳代、菊ヶ浜で剣道の試合をすること	7
第二章	佳代、三日間の謹慎を受けること	26
第三章	佳代、初めて宝塚の舞台と出合うこと	47
第四章	河井が借金を背負って大阪へ働きに行くこと	66
第五章	佳代、萩を飛び立つこと	85
第六章	佳代、憧れの宝塚音楽学校受験に合格すること	105

第七章 タカラヅカジエンヌ佳代の一日 126

第八章 佳代、バレエのレッスン中に倒れること 147

第九章 典子の恋に佳代が心を痛めること 166

第十章 入院中の河井を誠と共に見舞うこと 186

第十一章 佳代、トー・シューズに悪戦苦闘すること 208

第十二章 佳代、晴れて初舞台を踏むこと 228

表紙・扉絵

装幀

片上健二
土方弘克

虹を織る・上

第一章 佳代、菊ヶ浜で剣道の試合をすること

「佳代ちゃんも、河井先輩を相手に試合をするとは、威勢がええのう」

「うん。負けるとわかっちゃうけど、さすが佳代ちゃんじゃ。ああして海辺に立つっちゃう剣道着姿は惚れ惚れするのう」松林の中で、高村と石田が話をしている。

七月の菊ヶ浜である。左手のそこには、萩城址、指月山が見えている。

鳥崎佳代は、河井正雄を待っていた。試合は二時である。潮風が、佳代の頬を撫で、松林の中を吹き抜けていく……。

「おい鳥崎！ お前さっきから黙っとるが、やっぱり姉さんが心配じゃろう？」

と、高村は傍にいる誠に言った。

「ところでお前、姉さんの味方か、それとも河井先輩か？」

「それはあのう……引き分けになればええと思っております」

「バカモン！」

「すみません……」

その時、松林のどこかで、リリリリリ!! と、目覚時計のベルが鳴ったので、彼等は慌てて身を伏せ、キョロキョロし始めた。

「おい高村、今、ベルの音がしたようじゃが？」

「うん、そう言えば俺アも聞いたような気がする」

高村と石田が小首をかしげていると、島崎誠が、あっ！ と口の中で叫んだ。

「あれっ！ 来とりますで……」

「誰がだ？」

「あそこ……あそこに……」と、誠が指さす方を見て、高村たちは眼を丸くした。五、六十メートル先の木陰に、チラチラ女学生たちの姿が見える。

「あれや萩高女の……」

「佳代ちゃんのクラスメイトだ。三人……いや四人も来ちよる」

「女ごは口が軽いから、今日の試合のことを口外されたら大事になるぞ」

「もしバレたら、先輩も佳代ちゃんも、道場は破門、学校は退学じゃ……」

「これや止めさせたほうがええかな……」

「そりや無理じゃ」

「どうして?」

「河井先輩は、佳代ちゃんに、手紙の返事をもろうたちゅうて、あんなに有頂天になっちゃって、破門も退学も頭にありやせんぞ」

二人の話を、誠は身の縮む思いで聞いていた。(ああなんたる不覚! 偽にせの返事をぼくが書きさえしなかったら)と、悔やんでも後の祭りであった。

山口県萩市。幕末から明治維新にかけて、新生日本の歴史の流れを変えた志士たちを生んだ城下町萩は、昔ながらの佇たたずまいと、萩焼、夏ミカンで知られている。いま佳代が立っている菊ヶ浜は、阿武の松原とも呼ばれる萩の景勝地の一つである。

十七歳の佳代には、湧きおこる雲のようにさまざまな夢がある。

クラスメートと旅行するのもその一つ。いつか萩を出て、何かに自分を打ち込んでみたいのもその一つ。そして今日の試合もそうである。初めは、弟の誠をかばって試合を承知したのだが、道場一の使い手である河井とは以前から手合わせしたいと思っていた。まさか、こういう形の試合になるとは夢にも考えてはいなかったが、承知してしまったからには後には引けない。河井と立ち合えれば悔いはないし、これがチャンスだという意気込みも湧いて、バレた時はその時だという少しばかり開き直った覚悟も出来ている。佳代は、河井と試合をすることで、何かを飛びこえようとしている自分を感じていた……。

と、前方から、陽炎の燃え立つ白い砂浜を、剣道着姿の河井が面と竹刀を持って、ゆっくりとこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

「あっ！ 佳代ちゃんが動いた」

「シューッ、静かに！ ここにいろのがわかったら、佳代ちゃんの気が散るから……」
と、美佐が注意した。

「ああ、胸がキュッとなる眺めいの……青い海、青い空の下で、ああ、若い二人の青春じゃの」
「照ちゃん！ 感心していません。目覚時計は大丈夫！ また鳴り出したら大変よ！」
「服の下にしっかり抱いとるで……」

美佐たち四人は、すぐ近くに高村たちがひそんでいるのを、まだ気付かずにいる。

「佳代ちゃんも、この間はお見合い……そして今日は試合……」

「なかなかやるのう」

「試合は、誠まことちゃんのせいよ」

「ああ、うるわしの姉弟愛か……」

「またまた、そんな、ノンキなことばかり言って……もしも佳代ちゃんが負けたらどうするの？」と、美佐は気が気ではなかった。

「その時は、私たちが河井さんに会って、佳代ちゃんと付き合うなちゅうて談判に……」

「まりちゃん、あんた河井さんにそう言うの」

「じゃから、みんなで……」

……………

河井は近づいて来て、佳代との距離をおいて立ち止まった。自信満々、ニッコリ笑った河井が、いつもより佳代には大きく見えた。

「お待ちしちよりました」

と、佳代は挨拶をした。

「一本勝負でええかの？」

「はい……お願いします」

「では……」

二人は、互いに面をつけ、一礼すると、パッと左右にわかれて竹刀を構えた。

河井がさっと大上段に竹刀をふりかざした。得意としている片手面切りの構えである。防ぐより相打ちしかないと思つた。河井が海を背にするようにジリジリとまわっていく。面の金具の間に見える河井の眼が鋭い。佳代はじつと正眼の構えで相手の出るのを待っている。

波の音も、風の音も消えた。

……と、不意に、河井の眼が動いた。

(……あつ！ 見ちよる！ 高村たちめ！ 来るなちゆうたのに……あれつ！ いけん！ 佳代ちゃんのクラスメートじゃ……こりゃいけん！ 困った……)

海を背にした河井は、松林の中の二組の応援団を見て、狼狽え始めた。佳代は、それをスキと見て、一気に突進した。河井は打ち合いで辛うじてかわした。かわされて構え直そうとした時、佳代は砂に足をとられた。

(しまった)と、思わず眼をつむった。うなりをあげて河井の片手面切りが打ちおろされると思ったが、河井は動かずにいた。

佳代はやっと、態勢をたて直した。

そして更に数合の打ち合いのあと、佳代は、かけ声もろとも突進し、すれ違いざま、胴一本を鮮やかに奪った。

爽やかに勝ったと思った。

「参った！ 佳代ちゃんお見事！」

河井はその場で面をとるなり、佳代をほめると、いさぎよく渚を立ち去って行った。すると、松林の中から美佐たちが歓声をあげて走り寄ってきた。応援に来ていたことを佳代は初めて知ったのだった。

面をとったばかりの佳代の顔は、汗で光り上気していたが、立ち去って行く河井の後ろ姿を見送っているうちに、フト、顔をくもらせていった。

(河井さん、私に勝ちを譲ったのでは?)

そう言えば、砂に足をとられてよろめいた時、河井の腕をもってすれば、容易に打ち込めたはずなのに動かなかった。そればかりか、あのように簡単に胴を許す河井とも思えない。

(私が女だと思って……?)

佳代は、齒痒かった。今日の試合は河井にとって負けられないはずである。佳代が書いたという事になっている手紙の返事には、負けたら交際すると書いてあった。だから佳代が考え

ているように、河井が勝ちをゆずったとするならば、彼は交際を諦めて、片想いでよしとしたことになるのだが……。

試合のあと、照子の家でみんなと勝利のお祝いをしたが、佳代は浮かぬ顔をしていた。

「わかった、わかった。勝ちを譲ったの、どうのより、さあ、アンミツを食べなさいよ。佳代ちゃんの大好物じゃないの」

美佐が、佳代のむずかしい顔をのぞき込んで言った。

「ねえ、今日のこと、佳代ちゃんの光叔父さんが聞いたら、なんと言うじゃろうか？」

「あら！ 佳代ちゃんの……じゃなくて、私たちの光三郎さんの」

「海軍少佐、三十八歳の独身か」

「女ごのくせにと叱られるじゃろうの」

佳代は、思いがけず叔父の光三郎のことが話に出たので、ふと、気持がほぐれた。

「……叱られるどころか、もう振り向いてくれんいいの」

「ああ、そうなったら、私、絶望！」

「大げさいいの」

若い笑い声が、はじけるようにあがった。

（光叔父さんなら……この前、初めてのお見合いのあと、私が断った気持もわかってくれた……）

……今日のことだって、きっとわかってくれると思う……）

短剣を下げた凜々しい海軍軍人の光三郎の姿が脳裏を掠めると、口もとに、自ずと微笑が浮

